

音楽ジャンルの境界における“Authenticity”の多義性

—— “Gypsy Punk”の分析を通じて

室之園 直己 (大阪公立大学)

本発表では、音楽において“Authenticity”（真正性）という概念に付与される多義的な意味に注目する。文化における Authenticity とは、音楽学者の増田聡が述べるように、当該文化における「帰属の問題」と「価値の問題」の二つに関わり、Authentic なものは当該文化の範疇に含まれると同時に、しばしば当該文化において「よりよいもの」とみなされる（増田 2020）。音楽において Authenticity という概念は、古楽演奏や、民族音楽、ポピュラー音楽など様々な音楽分野で議論に使用されるが、それぞれの文脈で何が Authenticity と見做されるかは異なってくる。ではこの概念を巡る多義性が1つの音楽の中で衝突し合う事例が存在する場合にはどのような問題が起こり得るのだろうか。

本発表では、この問題について考察を行うためパンク・ロックのサブジャンルである“Gypsy Punk”を中心的な研究対象に据えている。Gypsy Punk は、ウクライナ出身でロマの血をひきながら後にニューヨークに移住した歌手であるユージン・ハッツと彼のバンドである Gogol Bordello によって始まった音楽ジャンルだ。この音楽ジャンルの大きな特徴は、少数民族であるロマ民族の伝統的な音楽と、主に英米圏で発展したパンク・ロックの要素が掛け合わされていることにある。しかし、この音楽ジャンルの評価は複雑で、メンバーが自らの音楽の Authenticity を主張する一方で、ロマの人々やロマ音楽の研究者からはロマ文化の伝統を破壊するものと指摘される。また、西洋の音楽シーンにおいては、ある種「革新的」なバンドとして好意的な評価を受けることがある。つまりメンバーとロマの人々が考えるロマ文化の Authenticity の違い、さらにパンク・ロックとしての Authenticity など、異なる文脈における Authenticity の意味が様々な立場の人々によって主張され、複雑に絡み合っているのである。

本発表では、この Gypsy Punk の Authenticity を巡る問題の構造を明らかにするため言説分析と楽曲分析の手法を用いている。バンドのメンバー、ロマの人々、ロマ音楽の研究者、西洋の音楽ジャーナリズムという異なる立場の人々の主張を整理した上で、それぞれが文化観と音楽的な面で Authenticity についてどのような考えを持っているのかを明らかにする。そして、Authenticity についてのそれら異なる主張が衝突する際に生じる問題を“Cultural Appropriation”などの概念を補助線にしながら明らかにする。最終的には、西洋のポピュラー音楽におけるモダニズム的な「革新」を Authenticity とみなす傾向と、より伝統的な文化の形式を大事にする傾向という異なる志向の違いが確認される。